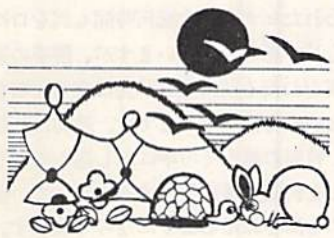
動物園だより

No. 5

昭和48年8月1日

都市と動物園

動物園長　林田禮俶



つい最近の話である。知人のKさんが、このところ仕事のことやいろんな問題が重なって気がくしゃくしゃするので、今日は仕事を休んで動物園へ行ってきた。そしたら頭の中のモヤモヤが一度に吹きとんでスカッとしたうえ、新たに仕事への意欲がでてきたよ……俺は忙しい仕事なので滅多に行けない動物園だが、以前と随分様子が変っていて知らぬ間に自分が動物の仲間に引き入れられて何だか清々した。と語ってくれた。

日常生活や仕事の上で、連日どうしょうもない様な日が続いて、心身共に疲労することは誰しも経験するもので、そういったとき一日休んで動物園の様な別の世界にとけこむことも、われわれ都市生活者にとって日頃のモヤモヤから解放されるよい手段といえるであろう。

このような動物園の持つ変った一面、異色ある効用を耳にすることが、最近とみに多くなってきた。

最近の動物園が都市の持つオアシスであるといわれるゆえんが、この辺にあるのではなかろうか。

近代社会の中にあって、パパやママが週末の日曜を子供たちと一緒に、また若者がお年寄が各階層をとわず、それぞれの気持で動物園を訪れる。そこには動物の生態を学ぶとか、レジャーを楽しむとかいうことのほかに、心のやすらぎと、自然への憧れを求めてここを訪れるゆとりが大切なのである。……ここに都市と動物園、人と自然とを結ぶコネクターとしての存在価値が大きくクローズアップされてくる。

現存する動物園で世界最古のものは、オーストリア・ウイーンのシェンブルン動物園である(1772)。当時の動物園は単に動物を檻に入れて飼っているに過ぎなかった。動物園が今日の様に進歩したのは19世紀のはじめ、ラッフィル郷によってロンドン・リージェントパークに開かれたロンドン動物園に負うところが多い。

日本でも明治のはじめ、田中芳雄の発意による生きた動物の常設陳列場が今の帝国ホテルのそばに開かれ、のちに上野の山に移されて、上野動物園のもとをなしているが、明治にできたこれら上野と京都に日本の動物園発展の糸口を見出すことができる。

19世紀は動物園発達の時代で、次々に世界各国に動物園が生まれ、しかもそれはもはや一部の人達のものではなく、一般民衆のものとして確立されていった。

20世紀に入ってからは、機械文明発達の波は動物園界にも押しよせ、そのあり方に著しい影響を及ぼした。例えば動物園の大きな目的とされた教育、研究、レクリェーションのほかに新たに自然保護の条項が加えられ、20世紀の後半にはいるやその傾向、要求はますます強くなり、特に都市化現象に伴なう大都市ほど、自然への窓口として欠くことのできない施設となった。

千年の歴史を誇る京都市でも、ここ10年余りの間にまちの様子も大きくかわり、都市化現象の波も例外とはいえない。1973年度船橋市政にも、〝あすの京都〟をつくる三大事業と共に公害のない緑と人間味豊かなまちづくりの実現が大きくとりあげられている。動物園の分野でもこのすさまじい都市化現象の中で、動物園に対する市民の需要も明らかに変化しつつある。即ち先ず第一に人間回復への足がかりとしての動物園であり、自然への正しい認識を深めるための窓口として重要な役割を果さなければならない。

こういった意味あいから、当園でもよき古いものは温存し、展示面においても、環境への対応においても、市民のふる里として細かな配慮をしながら、造園には特に気をくばり、あちこちに小道や小川をとり入れてどんどん緑をふやし、小川には魚を泳がせ、梢には小鳥のさえずりがきけるよう心がけている。

これからの都市動物園は、自然保護を切り離して考えることはできない。自然保護こそはわれわれ都市生活者が生きぬくための重要な課題であり、動物園の使命も大きくなってきた。私どもの園でもみなさんのご協力とよきアドバイスを得ながら発展への努力を重ね、市民の方々との対話ができるような、同好会的なものの結成にも追々手をのばしていきたいと考えます。

保護された野生鳥獣のゆくえ

保護記録から

今月号は野山や市街地で保護され、動物園にとどけられた動物達の中から、その顛末記をとりあげることにしました。

無心に餌をねだるヒナ達

4月21日にとどけられたムナグロというチドリの一種は、春は千島の方へ、秋には南半球まで渡りをする途中に、日本に立寄るといった長距離飛行家なのですが、左側の翼が折れて飛べなくなっていたものでした。この飛べないムナグロは、京都でその一生を送ることになるでしょう。

漸く目を開きかけた5羽のツバメのヒナは、巣に入ったまま、6月11日にやって来たものでした。このヒナ達の両親は、まさか蒸発したわけではないのでしょうが、帰って来なくなり、ひもじさを訴えるヒナ達に気付いた大家さんが、警察署に届けたものでした。

又、6月2日にとどけられたホオジロのヒナ4羽は目も開かない赤裸のヒナで、巣ごと、両親から略奪して来たもののようでしたが、キジのヒナ3羽は、7月3日の午後7時頃、舞鶴方面の川辺で捕えられたものでした。孵化後間もないヒナでしたから、怖いものの判別もつかない中に、簡単に捕えられたのでしょう。茂みの中で見守る母キジの目前で起こった誘拐事件だったに相違ありません。このヒナ達は衰弱がはげしく、手当のかいもなく死んでしまいました。

これらは、単に人間の好奇心だけで捕獲されたものではなく、保護のための善意によるものと信じたいのですが、その際の判断が実は重要で、傷ついているものは兎も角、迷い子になっていると思われるような場合、その近くで母親がやきもきしていることも多く、連れて帰るか、そっとして置いてやった方が良いのか、慎重な判断が必要です。

有刺鉄線に飛膜をひっかけて、自分からぐるぐる巻になってしまったムササビ、工事中の穴ぼこにはまり込んで迷い子になり、7月6日にとどけられた2頭のイノシシの赤ん坊など、人間が無意識に仕掛けたおとし穴は意外に多いようです。

親代り、手当、安楽死

とどけられたヒナ達は大抵何時間も餌を口にしておらず、ひもじい思いをしていますが、勝手の違う仮の親では、餌をねだる前に怖さが先に立ち、嘴を開ける気になれないのも当然なことです。最初は無理やりに嘴を開け、特製の餌をその中におし込んでやります。こんなことを何回か繰返しますと、馴れて、怪物のような仮親にも餌をねだるようになって来ます。こうなると給餌は至極簡単になりますが、今度は少しでもひもじくなると、チーチー、ピーピー四六時中餌をねだり、日がな一日、精魂込めて養育に当る親とは違って、仕事片手間の給仕役はてんてこまい。またかいなとぶつぶついいながらも、顔一杯に嘴を広げるヒナ達のとりこになる日が続きます。

傷つき、翼が折れ、衰弱のはげしいものには、強制的に餌をおし込んでもなかなか受けつけないどころか、折角飲み込んだものでも吐き出してしまうことがあります。一旦食べたものを吐き出して逃がれようとするのは、サギの仲間等に見られる三十六計のための自衛手段でもあり、衰弱のきわみに達したものは、全く餌を受けつけません。

昨年11月21日にとどけられたコサギは、右の翼に古い骨折があったため、切断手術を受けて元気を回復し、他の鳥達と一緒に暮らしています。

6月12日の夕方、動物好きな少年に発見されて保護されたササゴイ（サギの一種）は、翌日とどけられました。左の翼に骨折があったため、ガス麻酔のもとに手術を受けましたが、命をとりとめることは出来ませんでした。6月12日のキジバト、6月25日のコシアカツバメ、6月28日のツバメは、どうやら自動車事故に会ったものらしく、とどけられた時には手の下しょうがない状態で、まもなく息を引きとりました。

昨年9月6日、南の方へ帰る途中に拾われたツツドリ（カッコウの仲間）は、X線検査の結果、脊椎骨折であることが分り、助ける方法がなく、安楽死させたものでしたが、5月12日に来たキジバトのヒナは、生まれつきの奇型で、これも止むなく安楽死の対象となったものでした。

傷ついた季節の使者達

こうしてとどけられる動物（特に渡り鳥）を見てい

ると、居ながらにして季節の移り変りを感じさせられます。3・4月には南からの使者、ツバメが、又、遠く北国への旅の途中に立寄る旅鳥の仲間が傷つき、初夏には、ヒナ達や巣立後の幼鳥がとどけられます。9月には、繁殖地から帰るチドリやカッコウの仲間が、またしても不幸な姿で拾われて来ます。ウミネコやグンカンドリなども、台風に巻込まれてやって来ることがあります。渡り鳥達の終演の幕を引くのは、京都府の鳥オオミズナギドリ達です。大陸から第1陣の北風が吹き出す11月初旬、低い雨雲に連れられた冷たい時雨は、彼らの進路を迷わすのでしょう。様々な場所から、親切な人々によってとどけられて来ます。何羽かが集められ、体力を回復したこれらの鳥達は、以前は須磨海岸から放鳥されたものでしたが、昨年辺りからは、油で汚染された瀬戸内を避け、和歌山県の有田市まで運んで放鳥するようになりました。

果して自然へ……

保護され、人間を仮の親として育てられたヒナ達、渡りの途中で進路を誤まり、車や飛行機で帰り道の一部を人為的に援助された渡り鳥達が、果して自然の懐に戻り得るかといった疑問があります。方向感覚を失なってしまうような渡り鳥を、人為的に助けてやることは、自然淘汰の厳しさに水を差すものだという考え方も、否定は出来ません。又、人間の仮の親に育てられたヒナ達は、自然の厳しさ、害敵の怖さにどの程度対応出来るかという難かしい問題も残ります。

6月8日にとどけられたムクドリの幼鳥は、放してやっても腹がすくと窓から飛び込んで来ては、仮親の頭にとまったり、机の上で餌をねだっていました。こいつは将来どうなるのだろうと心配しながら、この甘えん坊に餌をやっていたものでしたが、6月27日夕方からは、突然に帰って来なくなって、裏切られた淋しさを味わったものでした。と同時に、後日、園内で遊んでいる姿を認めて、ああ、自然の懐に帰ってくれたのだなと喜びも感じています。

傷つき、弱った動物、迷い子になった鳥達に手を差しのべ、そこに問題はあるにしても、1羽でも、1頭でも自然の懐に帰してやることが出来れば、自然環境に大きな悪影響を及ぼしている人間の、ささやかな罪のあがないになるのではないかというふうに考えています。

保護鳥獣の窓口

傷ついたり、迷い子になった野生鳥獣の保護は、行政的には京都府林務出張所が窓口になっており、現在のところ、動物園が彼らの世話を引き受けています。野生鳥獣を保護された場合は下記へ御連絡下さい。

又、オオサンショウオは、生きている化石とも称される貴重な動物で、特別天然記念物に指定されております。この取扱いの窓口は、京都市文化観光局文化財保護課になっています。

京都府林務出張所　中京区富小路二条上ル
TEL 211-5748・5722・7584

京都市文化観光局文化財保護課
左京区岡崎公園　京都会館内
TEL 761-0020

（A.T.）

○○○○○○○○週間とは・・・・・

はて／何でしょう？

☆ 第1ヒント　毎年8月1日から1週間です。

☆ 第2ヒント　社会教育施設のひとつです。

日本動物園水族館協会に加盟している動物園62園水族館44館の年間利用者は、5000万人以上ありますが「日本動物園水族館週間」をご存知の方はごくわずかな人達です。従来は毎年10月の第2週（博物館週間と同時期）でしたが、46年から変更されました。

当園ではこの週間行事として1・2・3の3日間小学生4・5・6年生を対象に、サマースクールを開催しています。子供達が動物に対する愛情や認識を深めるために、飼育実習などを織り込んだ独自の指導を行なっています。また4・5の両日は午前と午後に各1回、技術職員が一緒に園内を回って各動物について説明いたします。

こういった機会に、1人でも多くの方が参加して下さって、世界各地に生息している動物の習性や自然に対する理解をしていただき、さらにご質問、ご意見などだして下さって、実りの多い週間にしたいものです。（T.W.）

47年度サマースクールの風景

❀動物豆知識❀

═動物たちの消夏法═

舌をのばして大きくあえいでいたトラが、突然身をおどらせてプールに飛び込んでしまいました。

日陰でぐったりしているもの、水浴するものなど様々ですが、この暑さに対して動物たちはどのようにして体温調整をしているのでしょうか？

積極的に体熱を発散させる方法や涼しい所に移動したり、またあまり聞きなれない言葉ですが、夏眠と呼ばれる消極的方法をとるなどいろいろあります。まず恒温動物である哺乳類や鳥類からみてみましょう。これらの動物では皮膚からの熱伝導や発汗、肺から呼気への伝導、尿や大便への放出が重要な役割をはたしています。ウマやサル、ヒトではこの汗を分泌する汗腺が全身に分布しているのですが、他の動物ではあまり発達していません。例えばイヌ、ネコでは足裏に、ウシやブタでは裸出した鼻に限られ、体熱発散には直接役立っていません。ですから浅い急速な呼吸をくりかえす事が唯一の手段となっているのです。体温の高い鳥類では肺だけでなく骨の中にまではりめぐらされている気のう面から効果的に発散させているのですが、外気温が30℃を越すとイヌ同様に激しく開口呼吸を行ないます。シチメンチョウにみられる奇妙な肉垂は体表面を大きくし、熱伝導をより効果的にする空冷式ラジエーターとして発達した器官で、ウシの頸部の皮膚のたるみやウサギの長い耳も同様の役割をはたしています。砂漠にすむ小動物で日中は、温湿度変化の少ない地中にひそむものがいますが、これは暑さだけでなく乾燥にも耐え得る方法として発達した適応行動です。

最後に外気温とともに体温の変化する変温動物はどうでしょう。低温に対しては冬眠以外に積極的な適応行動として、昆虫や魚の一部に体温を自律的に維持する機構が最近注目されているのですが、高温に対してはもっぱら涼しい所に逃げ込む、更に一歩すすんで冬眠同様に地中で仮死状態となってすごす夏眠と呼ばれる逃避適応行動が一般的で、熱帯地方のカエル、カタツムリ、肺魚類はその代表例です。わが国でも5～6月ごろによくみかけるカナヘビやトカゲが7～8月には夏眠に入り、その姿を消してしまいます。（I.K.）

≪で　き　ご　と≫

☆4月9日
キリンが生まれました。オスで「嵐山」と名づけられました。生まれて33分後には立ち上り、2時間20分後に初めて乳を飲みました。妊娠期間453日。

☆4月23日
爬虫類館の起工式が行なわれました。今秋に完成の予定で現在急ピッチで工事がすすめられています。総工費は6000万円です。

☆5月14日
ベニイロフラミンゴが今シーズン第1号の卵をうみました。一昨年・昨年と続けて1羽づつ繁殖しており、今年は何羽育ってくれるか楽しみにしています。

☆6月4日
ニホンカモシカが生まれました。両親はオス・メスとも当園で生まれたもので、3代目ができたことになります。子供はオスで「みなお」と命名されました。

☆6月24日
恒例の動物園写生大会が開かれました。参加総数は1,094点。審査の結果次の方々が金賞を受賞され、日本動物園水族館協会主催の全国児童動物画コンクールに出品されます。1年　かとうこういち(桃山東)・ますだただす(鞍馬)、2年　はやしひろこ(鞍馬)・榛沢小百合(有済)、3年　小西功(小川)・黄意晨(葵)、4年　堀内まみ(鞍馬)・村瀬美由紀(有済)、5年　小泉律子(有済)・井上俊治(有済)、6年　玉林善隆(有済)・大久保良子(有済)　（敬称略）

☆6月25日
ゴリラの子供達マックとミッチーは、今まで住んでいた哺育室が狭くなったので類人猿舎へ移る訓練をうけていましたが、この日、新居へ引越しました。

☆7月8日
5月30日と6月9日に生まれたアシカの子供の体重を計りました。5月の子供はメスで14.2㎏(40日目)、6月の方はオスで9.5㎏(30日目)。この他にも6月23日生まれのオスがおり、今年は合計3頭生まれました。（Y）

■ 第6号の発行は10月8日（博物館週間）の予定です ■

動物園だより　No.5　編集・発行人　林田禮俶
発行所　京都市動物園
京都市左京区岡崎・岡崎公園内　TEL 075(771)0210・0211